

ポスト冷戦期の国際関係認識と国内に滞在する移住者への安全提供の可能性

Understanding International Relations in the Post-Cold War World and the State's Provision of Safety to Migrants within its Territory

滝 知則 (長崎国際大学)

Tomonori Taki (Nagasaki International University)

キーワード 地域化、国際人口移動、相関論、地域アイデンティティ

移民政策をめぐる論議の中で、移住者に対する安全の提供の必要性の有無がとりあげられることは比較的少ないように見受けられる。当報告は、国際人口移動の受入国が移住者に対する安全の提供を開始するためには、何が必要なかを考察する。このため、受入国の政府が国内の外国人に安全を提供しない状況と提供する状況には、それぞれどのような観念的構造が影響するかを、特に現代の日本に着目して検討する。当報告は、国家の領域ならびに構成員の境界のはたらきを動的に把握し、また日本の国際関係の特徴を相関論の視点から理解することによって、移住者への安全の提供を受入国の義務と認識できるような集団アイデンティティを構築できる可能性が高まると考えられることを主張する。

1980年代後半から1990年代前半にかけて、日本が国内の移住者に安全を提供しなかったと考えられる状況が存在した。国際人口移動の受入国と領域内の移住者との相互作用は、見過ごされがちであるが国際関係の一つの局面である。国際関係のアクターのアイデンティティが変化するとき、そのアクターにとっての利益は変化し、さらに具体的な行動のしかたも変化する (Ruggie 1998, Wendt 1999)。受入国としての日本が国内の移住者に安全を提供しなかったのは、受入国のアクターと移住者に共通する何らかのアイデンティティが存在しなかったからだと考えられる(ホール、1998)。このような不提供は世界政治におけるガバナンスの隙間の一つである。

当報告は上記のアイデンティティの構築の可能性との関連で、次の3点を順番に考察する。すなわち、①国家の境界に変化する部分はあるのか、②政治経済圏の編成と国際人口移動の関係、ならびに③政治経済圏の編成と主権行使のしかたとの関係、である。第一に、国境、つまり国家の領域の境界については、一度引かれた領域の境界は変化しないとの考え方がありうる。一方、近世以降の国民国家形成の歴史に主権の及ぶ領域と構成員のそれぞれの境界が変動的な時期があったことを念頭において、今日の国境のありかたを観察することもできる(百瀬、1993)。第二に、政治経済圏の編成と国際人口移動の関係である。国際政治経済の観点から見ると、国際人口移動は、受入国の対外的な影響力の反映、受入国の活動の「意図せざる結果」であると言える。国際人口移動をこのように性格付けることは、次の考察から可能になる。

国際人口移動は、国際政治経済の構造的要因と移民システムが機能する中で、移住者本人の判断も伴って行われる (Castles and Miller, 1998)。この点を確認したうえで、当報告では、国際政治経済の構造的要因に着目する。人口移動はある政治経済圏の「周辺」を始点とし、「中心」を終点として起きる。これは、中心の周辺に対する経済的影響力の反映である。このような始点-終点(周辺-中心)関係は、近世以降の領域国民国家の形成過程においていくつも存在した。「始点-終点(周辺-中心)関係」が存在し、機能

しているという点において、国内人口移動と国際人口移動は共通している。一方、移動の距離の大小と移動の始点－終点の間に国境があるか否かという点において、これら二つの人口移動は異なる。しかし国内人口移動と比べ、始点－終点間の距離が大きい国際人口移動を可能にする要因として、国際資本移動の働きに着目することができる。国際資本移動は、距離が大きくても、中心の影響を周辺に及ぼし、国際人口移動の構造的な要因の形成を可能にする（サッセン、1992；ウォーラーステイン、1997）。

ここまでの議論を踏まえると、冷戦期とポスト冷戦期における日本とアジアの関係の変化を次のように整理できる。①世界秩序が冷戦からポスト冷戦へと変化したことに伴い、政治経済圏の編成に関して国家がとりうる選択肢は、貿易に加えて資本投資、さらに FTA(EPA)と増加した。実際、現代の日本は資本の輸出を始めとして、アジアの地域化に積極的に関与している（Hook et al.、2005）。②国際政治経済の中心の影響力が周辺に及ぶと、中心にとって意図せざる結果として、国際人口移動が起きることがある。これらの変化が国家の構成員に共通するアイデンティティにとって持つ意味の検討が、第三の考察である。

冷戦期の国際関係（受入国と領域内の外国人の相互作用を含む）では、国家構成員に共通するアイデンティティをナショナル・アイデンティティに限定できる余地が相対的に大きかった（これが規範的に望ましいかどうかは別の話である）。しかしポスト冷戦期の国際関係では、ナショナル・アイデンティティのみに限定していると、「安全の不提供」というガバナンスの隙間が発生する。これはつまり、国家の境界が、政治経済圏の境界は意図された結果として、一方構成員の境界は意図せざる結果として変化しているのに、主権行使のしかたの変化が追いついていないという状況である。

国際人口移動の受入国はそもそも、領域内の外国人に安全を提供する義務を持つと考えられる（ロック、1968）。領域内の外国人は国民ではないので安全を提供できない、というのであれば、国民と領域外の外国人との中間に位置する「超領域的公衆」（Scholte、2005）、あるいは「準構成員」（滝、2010a；滝、2010b）という存在を考えてはどうだろうか。つまり、新たに形成されつつある政治経済圏に適合する地域アイデンティティを、既存のナショナル・アイデンティティ（「国民」）に重層的に追加するということである。

移住者への安全提供を受入国の義務と認識できるような地域アイデンティティ構築の可能性は、ポスト冷戦期の日本の国際関係の現実を、動態的な国家観と相関論的な国際関係論の視点から理解することにより増加することが、期待される。

参考文献

- Castles, Stephen and Miller, Mark J. (1998) *The Age of Migration (Second Edition)*. Basingstoke: Macmillan.
- ホール、ロドニー・ブルース (1998) 集合的アイデンティティと国際システムの大転換. 日本国際政治学会編, 21 世紀の日本、アジア、世界, 国際書院, pp. 159-193.
- Hook, Glenn, et al. (2005) *Japan's International Relations*. Abingdon: Routledge.
- ロック (1968) 市民政府論. 岩波文庫.
- 百瀬宏 (1993) 国際関係学. 東京大学出版会.
- サッセン, サスキア (森田桐郎他訳) (1992) 労働と資本の国際移動. 岩波書店.
- Scholte, Jan Aart (2005) *Globalization (Second Edition)*. Basingstoke: Palgrave Macmillan.
- Ruggie, John Gerard (1998) *Constructing the World Polity*. London: Routledge.
- 滝知則 (2010a) 受入国にとっての国際人口移動の意義の再考察. 長崎国際大学論叢, 第 10 巻, pp. 13-25.
- 滝知則 (2010b) 国際関係の構造的変化の反映としての国際人口移動と地域アイデンティティ構築の可能性. 長崎国際大学論叢, 第 10 巻, pp. 27-39.
- ウォーラーステイン, イマニュエル (川北稔訳) (1997) 史的システムとしての資本主義 (新版). 岩波書店.
- Wendt, Alexander (1999) *Social Theory of International Politics*. Cambridge: Cambridge University Press.